「今」しか聞けない声

小川原正道

慶應義塾大学法学部教授

る経済と命の両立問題をめぐる分断につ

今回、最新審査対象作品のうち、「パ今回、最新審査対象作品のうち、「パスだ作品が最多で、次に多かったのが「絆」である。新型コロナウイルスのパンデミックのなかで、高校生が何を模索しているのか。「絆」が謳われた東日本大震災から十年を経て、この言葉を高校とは今、どう捉えているのか。「今」しか問えないテーマに対し、応募者各位はか問えないテーマに対し、応募者各位はか問えないテーマに対し、応募者各位はができる。

析出して、権力の側が「絆」に人々をはお、現代教育における集団主義的特徴をし、現代教育における集団主義的特徴をし、現代教育における集団主義のもとで個人が軽視されてきたと指摘すりズム」に変容したと言う。日本人はかのもとで個人が軽視されてきたと指摘が出して、権力の側が「絆」に人々をは、東中本人震災を機に、地縁的・血縁的意味

謀論に走り、

言論の制限を叫ぶようにな

自分に都合の良い情報だけ集めて陰

っているとして、「~からの自由」を「~

の自由」へと再認識すべきだと説く。

次席の福井論文は、パンデミックによを探究した、素晴らしい小論文であった。を探究した、素晴らしい小論文であった。とびないら、「絆」の負害要因を排除すべきだと説く。体験と古書要因を排除すべきだと説く。体験と古書の日本の福井論文は、パンデミックにより、自然発生的な絆の阳め込むのではなく、自然発生的な絆の阳め込むのではなく、自然発生的な絆の阳

デミック下の幸福とは何かを問うた、力学の知見やデータを活用しながら、パンは、生活の質を変えて不平等をなくし、は、生活の質を変えて不平等をなくし、人とのつながりや社会的連帯を構築するようシフトすることを説く。哲学、経済ようシフトすることを説く。哲学、経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた作品である。経済か命かといいて問うた、力

読み取る。

て、人々はあまりに多い情報を背負わさ性を武器に巨大化した言論の自由につい性を武器に巨大化した言論の自由につい誘中傷やフェイクニュースの問題から、誘中傷やフェイクニュースの問題から、

0)

重要性を訴える。

佳作三編についても、言及しておこう。

としてカミュの『ペスト』を読み解いた。自殺者の増加に焦点をあて、その処方箋自殺者の増加に焦点をあて、その処方箋

むこと」、「共感」に、「高貴な倫理」を出す原動力になり得るとし、「共に苦しれ戸惑う人間を敗北者と呼んで、これにれ戸惑う人間を敗北者と呼んで、これにれ戸惑う人間を敗北者と呼んで、これにいう言葉に集約させて理解し、引き裂かいう言葉に集約させて理解し、引き裂かれ」と

の行使を挙げ、互いを尊重する「寛容」の行使を挙げ、互いを尊重する「寛容」という命人は消極的で意見を持たない、という命見が言えないとし、その歴史と構造を解見が言えないとし、その歴史と構造を解見が言えないとし、その歴史と構造を解えている。日本人は「恥」を恐れて意思に挑んだ。日本人は「恥」を恐れて意思に対して、「匿名性」と自由るための方法として、「匿名性」と自由に関するヴォルテールを

世界が混乱と闇に包まれつつあるなかの可能性を提示してくれた作品に恵まれの可能性を提示してくれた作品に恵まれで、どう生き、社会を再構築していくべで、どう生き、社会を再構築していくべ

絆、コロナ、言論の自由

荻野安奈

(慶應義塾大学大学院文学研究科教授

い論文では、テーマとなる言葉を、とりあえず辞書で調べてから論じるパターンが多い。今年の「絆」がそれで、『広 辞苑』の定義を何回となく目にした。語 辞苑』の定義を何回となく目にした。語 お のにしのびない恩愛」と同時に「束縛」でも意味する。語の両義性を確認し、マ をも意味する。語の両義性を確認し、マ イナスの側面にも言及する作品は少なくなかった。中でも実感がこもっていたのは平野瑠理さんだった。

たいものだ。

彼女の小学校は、運動会で一糸乱れぬでまな文献の渉猟を可能にした。その体験でまな、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、さまが、平野さんに考える機会を与え、されば、運動会で一糸乱れぬ

小学校のクラスにおける同調圧力を、

国家レベルに拡大すればナショナリズムになる。その根底には、日本の場合、「『家」になる。その根底には、日本の場合、「『家」での先が平野さんの真骨頂である。権力その先が平野さんの真骨頂である。権力その先が平野さんの真骨頂である。権力をは、本来の個人レベルでの絆を抑圧することを彼女は見抜いた。「自然に生することを彼女は見抜いた。「自然に生することを彼女は見抜いた。「自然に生することを被女は見抜いた。「自然に生することを被女は見抜いた。「自然に生することを被女は見抜いた。」

を二極に単純化する問いそのものが間違を二極に単純化する問いそのものが間違を 一部の特権的な人々であり、複雑な事態 で、マクロな視点に立ったのが福井愛朝さんだった。 コロナは私たちに「命を取るか、経済 さんだった。 で取るか」という究極の問いかけをもた らした。そもそもいずれかを選べるのは らした。そもそもいずれかを選べるのは 一部の特権的な人々であり、複雑な事態

神へと見事に着地した。

でいると福井さんは説く。あえて経済 () 大いというと福井さんは説く。あえて経済 () 大いという彼女の希望が叶えられる () でいという彼女の希望が叶えられる () でいという彼女の希望が叶えられる () できる。 ()

進めて危なげがなかった。

造論の自由をSNSの普及という観点
がら扱った加藤萌歌さんは、現代に固有から扱った加藤萌歌さんは、現代に固有

た上で、再びヴォルテール的な寛容の精ンに怯える我々」を作り出しているとしな恥の文化が「共同体の中でサンクショを起こしたのは武島花梨さんだ。日本的き起こしたのは武島で製さんだ。日本的同じ言論の自由をヴォルテールから説

今年の全作品の中で、最も豊富な読書へ年の全作品の中で、最も豊富な読み体験を誇るのは佐々木大樹さんだ。読みい文体を生んだ。読後、カミュが『ペスい文体を生んだ。読後、カミュが『ペスト』でめざした他者への「共感」に、素

日頃 秀作並ぶ の読 書習慣が表れ た

権にしょう 善

慶應義塾大学商学部教授

連帯」が選ばれた。 こにいる――うつ病社会と『ペスト』の 佐々木大樹さんの「私はあなたと共にこ 中にあって」からは、次席、 二〇年四月、第五波を受けた四回目の官 んの「絶望を希望に変える知」と佳作、 小泉信三賞のコンテストは行われた。 日であった。そうした時代に第四十六回 言が解除されたのは二〇二一年九月三十 五つの課題の内、「パンデミックの渦 福井愛朝さ

中において知を結集し不平等を解消し、 などを読みこなして、パンデミックの渦 バナジーの『絶望を希望に変える経済学』 不平等、分断をあげる。 中だからこそ見えるものとして、 福井さんの論文は、パンデミッ アビジット・V・ 社会の クの渦

ばらしいものがあった。

デオロギーとしての絆を論じた筆力はす

『想像の共同体』などを参考にして、イ

ベネディクト・アンダーソンの

う言葉に違和感を抱く世代の感性は新鮮

四〇度を超える発熱のエピソードから始 会を「うつ病」社会と捉え、少しでも住 まる文章力も高く評価されてい 佐々木さんは、パンデミック渦中の社

連帯しなければならないと説く。

自らの

小泉信三賞に選ばれた。「それ 題「絆」を選んだ平野瑠理さんの論文、「日 題の一つとして検討している。しかもそ みやすくするためのありうべき倫理を課 本人の気質から考える「絆」と「社会」 家ゆえの実力のある論文となっている。 ト』を再考する論法をとっており、 の方法が、アルベール・カミュの『ペス 東日本大震災から十年になる今年の課 (絆) が 読書

最初の緊急事態宣言が出されたのは二〇

新型コロナウイルス感染症が拡大し、

ものがある。平野さんも論じているよう うになったのは、東日本大震災がきっか て絆と言われるようになった今、 けだった」という言葉にはドキッとする ろとするような意味で頻繁に使われるよ ナショナリズム的な集団意識のよりどこ 政治では、 自助、 共助、 公助、 絆とい そし

> 時代に「言論の自 ルと考える」、 「「言論の自由」の行使をヴォルテー 言論の自由」を選んだ武島花梨さん 加藤萌歌さんの「SNS 曲 の本質を考える

も佳作に選ばれた。 た恥の文化で、日本人が意見を言わない ース・ベネディクトの『菊と刀』が唱え 持たない」という通説に疑問を抱き、ル んは、「日本人は消極的で自分の意見を ヴォルテールの思想に共感する武島さ

考え、「エコーチェンバー」により「フ SNSを抜きに考えることはできないと 状況を説明していく。『菊と刀』への批 た論文に仕上がっている。 判の論文にも目を通し、バランスのとれ 加藤さんは、今の時代、言論の 自 ਜ

みる。そして誰でも発信者になることが の普及によって今起こっていることは を考察した上で、エーリッヒ・フロムの ェイクニュース」が引き起こされる現象 「言論の自由からの逃走」ではないかと 『自由からの逃走』 にヒントを得、 S N S

の意味を考え直すべき時であると説く。 せる作品が選ばれた年であった。 できる今の時代、一人一人が言論の自由 今年は、 日頃の豊富な読書量を実感さ

審査を終えて

(慶應義塾大学経済学部教授) 田だ 伸ん

例年のことだが、小論文コンテストの

通するものを感じる。

とは別次元の話だが、今の高校生諸君が ことと「実際に小論文を完成させる」こ ものが多かった。もちろん、「書きやすい」 が、応募作品を読んでみると、課題3の るいは2が前者に該当するように思った 課題には「書きやすい」ものとそうでな 言論の自由について真面目に考えている 「言論の自由」を選んだ作品にも優秀な いものがある。今年は、課題1や4、あ

のあり方、とくに学校教育におけるあり た。この作品では、日本における「絆」 を選んだ平野瑠理さんの作品が選ばれ さて、小泉信三賞には、課題2の「絆」 ことを知って、うれしく思った。

ろが気になった。

それがナショナリズム的な「絆」に近づ 方が、外国との比較を含めて検討され、

くことへの懸念が表明されている。自分

ある。 うだが、そこにも本論文の問題意識と共 拠がうまく融合された、優れた小論文で は協調が得意ではなかった」と述べたそ 互いに邪魔しないように協調する」「私 た眞鍋淑郎氏が、記者会見で「日本人は 昨年のノーベル物理学賞を受賞し

の経験と文献・資料に基づく客観的な証

望を希望に変える経済学』に基づいて不 取り上げ、バナジーとデュフロの共著『絶 ミック渦中での経済的な不平等の問題を 次席の福井愛朝さんの作品は、パンデ

平等の解消に向けての提案を行ったもの

である。福井さんが今回のパンデミック 要約を元にした断定的な主張が多いとこ ことは評価できるが、書籍からの引用や 多様な文献を参照して本論文を仕上げた のもたらした分断について真剣に考え、

識から出発し、 く環境は大きく変わった」という問題意 こ十年ほどの間に、言論の自由を取り券 の課題が軸となっている。加藤さんは「こ 武島花梨さんの二作品は 佳作の三作品のうち、 フロムの『自由からの逃 加藤萌歌さんと 「言論の自由

> だろうか」という主張は傾聴に値する。 NSの普及によって今起きていることは 論の自由」について分析を行った。「S 走』の論理をうまく使って、今日的な「言 「言論の自由からの逃走』なのではない

における言論を取り巻く状況を「伝統的 な視点から分析している。そこでは、日 それに対して武島さんの作品は、日本

本人の

〈恥〉に対する意識の考察から出

険性の指摘なども織り込まれており、読 経験や、SNSにおける「匿名性」の危 造することの必要性が語られる。自身の を手に入れるために「寛容」な社会を創 発し、最後は「〈本物〉の言論の自

において「心の問題」がなおざりにされ ばれた。この小論文はパンデミック渦中 ているという問題意識のもと、カミュの 佳作には、佐々木大樹さんの作品も選

『ペスト』の読解を通じて、住みやすい

みやすい小論文に仕上がっている。

をつまれることを願っている。 は抽象度が高く、読み通すのに苦労した。 社会のあり様を考察している。ただ、「友 「連帯」などのキーワードを用いた分析 皆さんがさらなる高みを目指して研鑽

家内制手工業

はやかわ

(社長・慶應義塾理事・評議員/ 株式会社早川書房代表取締役) (本)

でには、作家や翻訳者、編集者や校正者考えている。いかに技術が進歩してもボタンを押せば文章が現れて本が出来るわけではない。ひとつの作品が完成するま版こそが家内制手工業の最たるものだと出版業を生業としている私は常々、出出版業を生業としている私は常々、出出版業を生業としている私は常々、出

い。遠回りに思えても、毎日、新聞―― み手の心に響く文章を書くことはできなみ手の心に響く文章を書くことはできなみの心に響く文章を書くことはできない。インターネ

要であり、熟練の技が欠かせない。のたゆまぬ努力、つまり「手作業」が必

できれば紙のもの――に目を通して題材できれば紙のもの――に目を通し込む。そので、自身にしっかりと落とし込む。その日々の努力の積み重ねが物を言う。 日本の努力の積み重ねが物を言う。

と「への自由」の違いを説明し、

さらに

ッヒ・フロムの論を引き、「からの自由

積極的自由の必要性へと続く論の運びも

人」、「欧米」と「日本」といった対立軸の源泉を解き起こしていく。「集団」と「個という言葉が持つ「窮屈さ」「違和感」は、小学生時代の実体験から始め、「絆」

本人の気質から考える『絆』と

『社会』

次席となった福井さんの「絶望を希望いた。権力・体制批判にとどまらない結いた。権力・体制批判にとどまらない結とは思えない文章力と構成力には舌を巻とは思えない文章力と構成力には舌を巻

を見直す良い契機になると進める論旨は経済を取るか」の二極論こそが分断と二経済を取るか」の二極論こそが分断と二極能を提案する。さらに、パンデミックの肢を提案する。さらに、パンデミックの選択を提案する。さらに、パンデミックの渦中でに変える知」は、パンデミックの渦中でに変える知」は、パンデミックの渦中で

整理がよくできている。その後、エーリの提示から、その意味の歴史的変遷までに『言論の自由』とどう付き合うかという動機論の自由」とどう付き合うかという動機に『言論の自由』の本質を考える』は、「言いた、別用も正鵠を射ている。

でしっかりと記述できている。

由実現への具体策が欲しかった。滑らかだ。惜しむらくは結論に積極的自

帯」は、問題意識が明確で、様々な文献にいる――うつ病社会と『ペスト』の連佐々木さんの「私はあなたと共にここ由実現への具体策が欲しかった。

をもっと盛り込めば、より迫力が増したち、話の流れにブレがない。自分の体験として、自分の立ち位置をしっかりと持点に感心した。現在の社会に生きる学生から知見を集め、論理的に展開している

であろう。

散してしまった感はあるが、自分の言葉だっていることがわかる。やや論理が拡分野や著者の幅が広く、多くの文献にあい込んでおり説得力がある。引用も、政り込んでおり説得力がある。引用も、政り込んでおり説得力がある。引用も、武島さんの「『言論の自由』の行使を武島さんの「『言論の自由』の行使を

き、深みと説得力が増すだろう。を、深みと説得力が増すだろう。とい文章を書くには、自分の目と耳での要素を取り入れると読み手の関心を惹め要素を取り入れると読み手の関心をさいた。けっしてい文章を書くには、自分の目と耳で